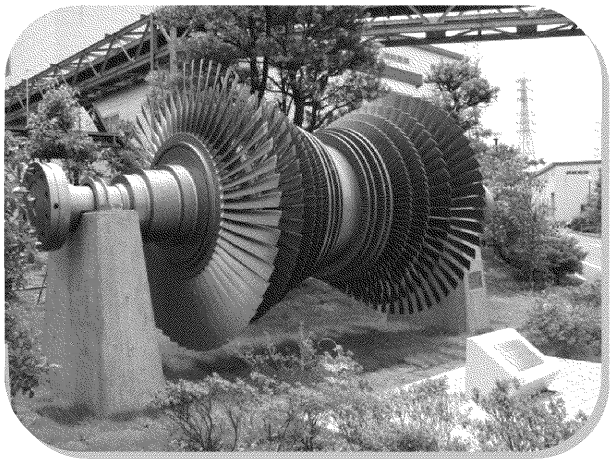
かわさき産業ミュージアム講座
記念論文集



平成23年3月

川崎市川崎区役所

はじめに

●かわさき産業ミュージアムとは

京浜工業地帯の中枢としての役割を担ってきた川崎区には、産業技術の発展の歴史を物語る近代化遺産や産業文化財等の貴重な資料が数多く残存しています。これは川崎区を特徴づける社会的資源であり、市民と企業の共通の誇りとして、新たな地域づくりの中核となり得るものです。

そこで、これらを保存し活用する方向で検討するなか、**川崎区の区域全体を展示場に見立てて、区内に散在する近代化遺産・産業文化財等をネットワークした分散型産業ミュージアム構想**が平成 14 年 2 月浮上しました。このミュージアム構想は、企業等の壁を越えて近代化遺産・産業文化財等に市民が気軽にアクセス・見学できる条件整備と仕組みづくりを行うことを目指しています。

その目的は、ものづくり技術と文化の継承発展を目指して、次代を担う子ども達の教育の場、市民の生涯学習の場として活用するとともに、魅力ある区づくりの新しい柱に産業観光を据えていこうというものです。

●近代化遺産・産業文化財とは

ここでいう「近代化遺産」は、幕末から戦前に渡り日本の近代化に貢献した産業・交通・土木などに関わる建造物・構造物・工作物等を指します。

また、産業発展に寄与してきた機械・設備・製品等を「産業文化財」と定義しています。産業文化財は、古いものだけでなく最新技術も対象としています。

なお、いわゆる「産業遺産」は、近代化遺産・産業文化財に含まれると考えています。

●川崎区産業ミュージアム専門委員会とは

川崎区産業ミュージアム専門委員会は、かわさき産業ミュージアムに係る諮問機関です。かわさき産業ミュージアム形成のための指針として、平成 15 年 2 月に「かわさき産業ミュージアム構想」を策定し、「かわさき産業ミュージアム本格実施に向けた提言」をまとめました。

●かわさき産業ミュージアム講座記念論文集とは

川崎区役所では、川崎区及びその周辺に存在する様々な近代化遺産・産業文化財や地域、地域の企業の社史について学び、自ら発見・研究し、かわさき産業ミュージアムの資料等の調査研究活動に寄与する活動の担い手を育成することを目的とし、「かわさき産業ミュージアム講座」を平成 17 年度から実施しています。講座開始から 5 年が経過し、地域の産業に関わる歴史、社史、近代化遺産や産業文化財について、調査・研究する市民が増えつつあります。

そこで、このたび、市民による調査研究を発表する場として、また講座開始 5 周年を記念して、「かわさき産業ミュージアム講座記念論文集」を発行します。

目　　次

「かわさき産業ミュージアム講座記念論文集」の発刊によせて ―――――――――――――― 1
川崎区産業ミュージアム専門委員会　委員長　後藤　治

産業遺産の保存活用とエコミュージアム ―――――――――――――――――――――――――――― 3
川崎区産業ミュージアム専門委員会　大原一興

市民論文

１　100 年前の煉瓦がでてきた－御幸煉瓦製造所 ―――――――――――――――――――――― 11
石田勝俊

２　工都川崎を伝える産業遺産「工業報國」の碑板の保存に取り組んで ―――――――― 16
野口始男

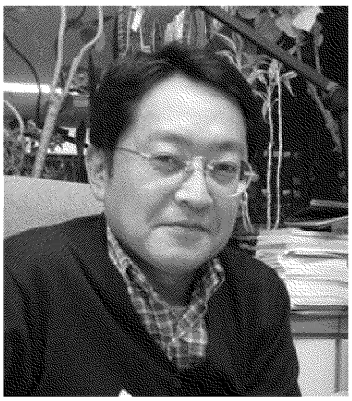
３　川崎市営軌道（市電）と無軌条電車（トロリーバス） ―――――――――――――――― 23
山中敏之

資 料

かわさき産業ミュージアム講座これまでの経過 ―――――――――――――――――――――― 35

「かわさき産業ミュージアム講座記念論文集」の発刊によせて

川崎区産業ミュージアム専門委員会
委員長　後藤　治



博物館・美術館等のいわゆるミュージアム（Museum）と呼ばれる施設には、基本的な原則として、4 つの機能を備えなければならないとされている。それは、「収蔵」「研究」「展示」「教育」である。

この 4 つの機能は、以下のように説明される。まず、ミュージアムの基本は、貴重な物品を収蔵保管することに始まる。次に、収蔵保管した物品を、多くの人々に展示公開しなければならない。収蔵する物品を決めたり、物品を展示公開したりするには、学芸員による研究が必要である。そして、物品の展示公開は、示威行為ではなく教育を目的としなければならない。また、この 4 つの機能はそれぞれ独立したものではなく、「収蔵」された物品を「研究」することで、「展示」される物の解説内容が充実し、ひいてはそれが「教育」効果を持つなど、相互に密接な関係を持っていることがよく知られている。

それでは、かわさき産業ミュージアムはどうだろうか。

これまでの活動を振り返ってみると、「展示」「教育」機能は、展示物が各企業の敷地内等に豊富に存在し、所有者等の協力によってその公開が図られており、毎年市民向けの工夫を凝らした見学会が開催されたり、市民向けの公開講座が行われたりしているので、かなり充実していると言えそうである。これに対して、「収蔵」「研究」はまだまだということになる。それは当たり前で、かわさき産業ミュージアムは、1 箇所に展示品を集めて収蔵する形をとっていないところに特徴があるので、「収蔵」機能が無いのは当初からの計画通りである。同様に、かわさき産業ミュージアムは施設に常駐する専門の学芸員が存在するようなミュージアムとは異なるので、「研究」機能を持たないこともまた然りである。

こうしたなかで、今回の論文集の刊行は、ミュージアムにおける「研究」機能の登場として、素直に喜びたい。さらに言えば、今回の論集の刊行は、本来学芸員の果たすべき「研究」の役割を市民が行っていることを意味している。こうした「市民学芸員」の存在こそ、かわさき産業ミュージアムを今後ますます発展させていくものと考えられる。

とはいえ、ミュージアムにおける「研究」機能の充実は、それが他の 3 つの機能に良い作用を及ぼしてこそ本当の意味がある。つまり、「研究」が進むことで、市民に展示品の持つ意義がわかりやすく伝えられるようになったり（展示・教育の充実）、今後展示品に加えるべき保管候補物件が明らかになったり（収蔵・展示の充実）するからである。その意味では、今後論集が重なり、市民学芸員の研究によってミュージアムの展示品に加えられるべき産業遺産が新たに発見されたり、市民学芸員の研究が見学会での解説や公開講座に活かされたりするようになることが、将来の理想であろう。

この理想が達成される時までに、市や区が中心となり企業等と協力して、所有者等が不要

とした貴重な遺産類を、収蔵格納とは別の手段で保存活用できるさらに上手な仕組みを確立してもらいたいものである。その仕組みを確立することこそ、収蔵庫を持たないかわさき産業ミュージアムの「収蔵」機能になると私は思う。

◆後藤　治

東京大学・同大学院で建築学を専攻。文化庁の文化財保護部（現文化財部）建造物課文化財調査官を経て、現在は工学院大学工学部建築都市デザイン学科教授。博士（工学）。一級建築士。かわさき産業ミュージアム専門委員会の委員長を務めており、文化財及び産業遺産等に関して非常に造詣が深く、幅広く活躍している。

産業遺産の保全活用とエコミュージアム

川崎区産業ミュージアム専門委員会
大原　一興

１．エコミュージアム事例における産業遺産の保全活用

近年、わが国においても、産業文化財、近代化遺産の保全をめぐる関心が高まっており、とくに観光事業への期待などから地域の活性化に資する可能性を見出し、まちづくりへの活用という視点から注目がなされている。かわさき産業ミュージアムは、いち早く、エコミュージアムの手法をもちつつ、地域の資産としての産業遺産を調査し保全しようという試みに着手し、これまでにもその資産をもとに学習活動を展開してきている。ごく最近になって、工業地帯の観光的な価値が再発見され、多くの来訪者を集めることとなっているが、その一種の流行の波はいずれ沈静化するであろう。外部からの観光客増加に一喜一憂したり、一時的な来訪者に多くを迎合する必要はない。ここでの活動の基本はミュージアムにあるからである。なぜなら、ミュージアムこそは、すぐれて地域の活力を醸成する社会教育のための施設であり、観光のための集客施設ではない。これまでのように、地域社会に対する知の集積と還元を粘り強く続けるためのエコミュージアム組織として産業ミュージアムが持続的に地域と共に発展することが望まれる。

本稿では、エコミュージアムにおける産業遺産保全の事例などを参照しつつ、その目的について再確認をし、かわさき産業ミュージアムの今後の展開の方向性について考察することとしたい。

国内において、川崎地域のようなエコミュージアムの例は他には無いが、地域の産業遺産の活用の例としてエコミュージアムとしての取り組みを進めている地域のひとつに、栃木県の足尾町がある。とくに銅山と鉱毒事件、そして労働争議で有名となった足尾の町は、現在、市の進める観光事業としてのエコミュージアム構想を背景に住民団体である足尾町楽迎員協会の地道で熱心な活動に支えられ、環境教育としての側面にも支援者が厚みを増しその意義について大学からの提言がされるようにもなり（赤塚他 2004）、総合的な地域社会全体の持続可能性を考える営みへとつながっている。

足尾の活動で特筆すべき点は、一般の住民による足尾楽迎員協会とその運営による足尾町歴史館の存在であろう。町全体の歴史に関する資料館的な活動を担っているのが住民の自主的な団体であるということは、エコミュージアムの基本的な住民の参画の方法として好ましい。この活動はある強力なキーパーソンによって進められてきたが、それを生み出したものが「ふるさと足尾歴史セミナー」という一種の社会教育活動であったことも、また正統的な働きかけだったのだと思う。しかし、もう一方で、足尾町の中には緑化を進めるグループがある他には、地域には自発的な活動は今のところ生まれていないとの話であった。自然系と歴史系の 2 者があるだけだということである。今後はこれら以外の活動が生み出されたり、あるいはすでに行われているかもしれない地域活動を発掘し強化したり、またお互いに多くの視野からの活動がネットワークを組んでいくことが必要だろう。そうなって初めて、エコ

ミュージアムらしさを得ることになる、すなわち、地域の人々の様々な知恵や熱意をお互いに交換し触発することによって学び合う地域の共同体が形成されるのであろう。

同様の銅山地域として有名な地域に、世界遺産に登録されているスウェーデンのファールン（Falun）市があり、そこは一時期、世界の銅産出の 3 分の 2 を占めていたが、実はファールン市にはダーラナ(Dalarna)県の博物館があり、その学芸員らを中心にして 90 年代から地域全体のエコミュージアム構想がつくられていた。現在もその検討会はエコ研究会として続いているが、市の方針としてはエコミュージアムよりは世界遺産登録による観光基盤の確立を先行させてきたので、名称としてはエコミュージアムを標榜していない。しかし、この推進メンバーは、世界でも最大規模のベリスラーゲン・エコミュージアム（Ekomuseum Bergslagen スウェーデンで最も有名なエコミュージアム）を設立してきた人々が中核になっており、博物館の研究や活動スタイルはきわめてエコミュージアム的である。ファールンでは、鉱山労働者の住宅地域が大規模に保存されている。現在でも基本的には当時の住宅建築を保存しながら居住者が住んでおり、いくつかの重要な建築物については市が買い取っている。例えばエルスボリ(Elsborg)という地域だけでも、エルスボリ町の愛好会というような NPO 組織があり、70 棟ほどの住宅に対して解説板が設置されている。エルスボリでは「スウェーデンで最も小さい労働者住宅」とか「後に有名な役者になった〇〇さんが住んでいた家」などというようなものが挙げられている。価値とは誰かにお墨付きをもらって与えられるものではなく、様々なレベルにおいて住民により創出されるものもあって良い。

同じく世界遺産に登録されている銅山の町ローロス（Røros ノルウェー）にもエコミュージアムがあり、そこでは鉱毒による被害を「負の遺産」として伝えていこうという強い意志がある（大原 1999 参照）。負の歴史も住民のひとつの大事なアイデンティティーであるとの考えから、公害・環境問題の展示が啓発的に行われ、最近の問題としてチェルノブイリ原発事故による環境汚染の広がり、さらには原発の危険性（安全性）にまで言及した展示がなされている。「過去からの未来」を大事にし、過去を現在のことのように眼にすることの大切さを重く見て、例えばローロスでは、汚染された土壌をあえてそのまま残し可視的に保存している。エコミュージアムを目指すのであるなら、実物を見せ実感的に訴求するという、博物館としての基本的な力強さを見せることが必要である。

一方、ファールンでは、周囲の環境汚染地域の保全については、はっきりとした保存方針は立っていなかったが、負の歴史のひとつとして、鉱山の災害の典型である落盤事故について、その様子をＣＧによる 3 次元映像でダイナミックに再現していた。それは、そこに数多く存在していた労働者たちの視点からの日常生活と仕事、そして日々の不安について表現されていたのが印象的であった。川崎でも、その労働の苦労や公害の事実、健康問題などの生活に密着した歴史をもっと立体的に表現していくと良いと思う。

２．活性化の目的　ー観光ではなく地域住民の学習　誇りをとりもどすことー

とくに海外のエコミュージアム事例からわかってくることは、産業遺産を保全することによる活性化の目的は、外部からの来訪者を集客するような魅力を発見するだけではなく、そ

の地域の固有性を表現するということである。エコミュージアムの活動によって、観光としての収入に結びつくことが目的なのではなく、地域住民の知識や技術の修得と、もちろん産業の持続性、それらによって生まれる地域への矜持、誇り、愛着といった精神性が何としても醸成されていくことが重要なのである。すなわち、活性化するのは地域の住民一人ひとりであり、人を育てる社会教育としての機能が本来のミュージアムの役割なのである。

様々な国々のエコミュージアムが、それぞれの地域の抱えている貧困を解決する方法として活動が進められている。基本的には地域の住民に、地域の良さと本質について気づいてもらい、知識や技能などによって自らの力を高めて様々な起業を誘発することにつながっていく。単に、過去のものを愛でるのではなく、そこから自ら依って立つ地域の意味を読み解き未来の自発的な産業に結びつける、という壮大な方向性が、エコミュージアムでしばしば使われるキャッチフレーズ「過去から未来へ」「記憶の前進」などといった言葉に表現されているのである。貧困からの脱却といった場合に、単に資源を切り売りし経済的に収益を得る方法で貧困を克服するのではなく、地域の資源の価値を増すような方法で展開することが重要であるとも言われる。

日本の場合、大きく貧困的状況にあると言えるのは、物質的な貧困よりも精神的な貧困なのではないだろうか。地域や時代において、自分自身が何者かを測りにくくなっている均質社会において、人々は何らかの自分らしさとそれを対他的に認めてくれるための弱いきずなやつながりを求めている。このことは多くの都市が抱える社会的な貧困の状況のひとつであろう。そこにこそ、現代のエコミュージアムの存在意義はあるのだと言えよう。産業遺産を地域の特質として豊かに保有する川崎地域においては、まさにこの地域に培われてきた生活の営み、その重層的な歴史を知ることにより、この地域に生きる人として自分のアイデンティティをとりもどすことができるのではないだろうか。大都市におけるエコミュージアムのひとつの重要な意義であると思われる。

３．エコミュージアムの近年の課題とかわさき産業ミュージアムへの期待

エコミュージアムに求められる課題として、ここでは、評価と連携という 2 点を挙げておきたい。エコミュージアムは、その名称が生まれた昭和 46(1971)年からもう 40 年が経つ。日本においても、実に様々な実例が展開してきているが、次の世代につなげていくことに関しては、それぞれが独特の展開をしている。これまで、事例性を重んじて来たが、実はそれぞれのエコミュージアムは相互に交流をすることで、お互いを高め合っていくことができるはずである。ヨーロッパのエコミュージアムはイタリアを中心として平成 15(2003)年にネットワーク「ローカルワールド」を組織して、より良いエコミュージアムの方向性の議論や哲学の研鑽、組織化や財源などの組織運営に関することから、スタッフのインタープリターとしての実践研修など具体的におこなってきている。日本でも東北地域で交流を始めているが、神奈川県内のエコミュージアムは、各地の活動団体が集まり、平成 19(2007)年に連絡会を発足させている。単なる連絡会として、これまではあまり活発ではなかったが、今後は活発に活動を行っていく時代に移ってきたのだと思う。ヨーロッパではそのうちのひとつの

活動として、統一的なチェックリストを作り、イタリアを中心に評価をすることを試みている。その項目を最後に資料として示しておくので参照されたい。このチェックリストは、全部で 25 項目から成り、大きく次の 3 つに分類されている。A（エコミュージアムとして設立される前の状態について）、B（現在のエコミュージアムの状態について）、C（反エコミュージアム要素）で、それぞれ、項目の番号についているアルファベットに対応している。これらの項目を、エコミュージアムにとって重要な Museum,Heritage,Participation とその他の 4 区分にまとめなおして、表にしている。これらのチェックリストをもとに自己の活動を再評価することによって、独自性を再確認することができるし、相互交流のために効果的な情報資料ともなる。

平成 18(2006)年にちょうど設立 20 年でヨーロッパのネットワークの幹事役となったスウェーデンの鉱山地域にあるベリスラーゲン・エコミュージアムでは、7 市町村にまたがる広域のエリアを対象として様々な活動を行ってきたが、最近大きな展開として注目したいのが、周辺のエコミュージアムとの連携である。

周辺のエコミュージアムとしては、ヒュスビリンゲン（Husbyringen：ふるさとの輪 1970）、イエルンリケット（Järnriket:鉄の王国 1992）という類似したテーマのエコミュージアムがある。実はもともと、この辺の地域全体は、様々な鉱山の豊かな地域として「ベリスラーゲン地域」と総称されていた地域で、たまたまこの固有名としての「ベリスラーゲン・エコミュージアム」は、その中の 7 市町村だけで構成される一部だけだが、今では、他のふたつのエコミュージアムと「鉄の道」というルートで連携をとるようになっている。これは、いわばメタ・エコミュージアムという展開で、ただし活動はそれぞれのエコミュージアムで独立している。 このように、他のエコミュージアムとのネットワークし、連携をとることが、次の時代のエコミュージアムの展開として、ひとつの望ましい方法であると言えよう。

川崎地域では、豊富な産業遺産としての資源を詳細に資料化しつつ、住民の活力を高めることや、地域への愛着を育てることがまず重要となろう。そのためには生活に密着した事柄の要素をきちんと伝える対象とする努力を行い、その次の段階においては、負の遺産についても積極的に取り上げることで、より人間生活の視点からの地域社会の認識を深めることが重要であろう。さらに神奈川県内の他のエコミュージアムや博物館組織との交流を深め、相互に高め合う仕組みを築き上げていくことが当面の方向として求められているのではないだろうか。

表　エコミュージアム・チェックリスト試案（Corsane, Davis, Maggi らによるものの和訳）

Museum　博物館としての活動・研究	
A-2	現在のエコミュージアム活動の契機となるような、類似した計画や構想、政策などが存在していましたか？
A-3	その地域に、地域資産の管理や博物館組織に関してその古臭いやり方に対して見直す動きはありましたか？
A-4	その地域では、文化財保護と博物館活動にギャップはありましたか？
B-2	エコミュージアム活動に対し、一般の人の参加に門戸を開いていますか？
B-8	共通の特性を持つある一定の地理的な領域において運営されていますか？
B-10	拠点やアンテナ、サテライトが点在する“分散型の博物館”となっていますか？
B-16	地域の「もの知り」人レベルから学術的専門家レベルまで、様々なレベルや側面からの調査・研究を受け入れていますか？
B-17	総合的で学際的な研究に対し、積極的な呼びかけを行っていますか？
Heritage　地域内遺産の現地保全	
A-1	地域のエコミュージアム資源（サテライト、アンテナ、サイトなど）はもともと独立のものでしたか？（ひとりの管理者や運営者によって所有・管理されていませんでしたか？）
A-6	エコミュージアムのプロジェクトが始まる前から、地域の文化的な環境や風土の特徴、つまり「地域の趣き（センス オブ プレース）」を理解していましたか？
A-7	その地域で共有された地域のアイデンティティはありましたか？
A-8	資産の価値や意味、使用に関し、その地域の人々に認識されていましたか？
A-9	地域外の人にとっても地域が所有する資産（有形・無形の資産、不動・可動な資産など）は魅力的なものでしたか？
B-7	地域独自の考え方やアイデンティティ、地域特性に焦点をあてた活動をしていますか？
B-9	過去、現在、未来へとつながる持続的な側面を考慮していますか？ （つまり、空間的な側面だけでなく時間的な側面も持っていますか？）
B-11	遺跡や資源の現地での保存・保護・保全に積極的に取り組んでいますか？
B-12	無形の遺産（伝統芸能、音楽、技術、文学、しきたりなど）にも目を向けていますか？
B-13	持続可能な発展と資源の有効活用に積極的に取り組んでいますか？
B-14	地域の資産は、地域と住民のより良い未来に向けて変化したり発展することが許容されていますか？
B-15	過去と現在の生活と環境との関わりについて記録を続けるプログラムを促進していますか？
B-19	その地域の技術と人間、自然と文化、過去と現在の関係性が理解されていますか？
C-2	民家園のように、民家や地域遺産や資産を移築・移動したことはありますか？
C-3	オリジナルの建物や産業なものより、再建・復元されたものを重視して展示等をしていますか？

Participation　住民の主体的参加	
A-5	地域の博物館と文化財保護の専門家たちが、エコミュージアムの哲学と実践を理解し、他の分野の関係者に対しても、エコミュージアムの方法を薦めていこうという意思はありましたか？
A-10	文化資産や自然資産に関心をもつ団体のネットワーク（情報交換など）が存在していましたか？
A-11	その地域の文化資産や自然資産に対し危機感を持つ人々を集め、活動に動員する努力を行っていますか？
B-1	エコミュージアムは地域住民の手によって管理されていますか？
B-3	地域住民と専門家（有識者）とが、地域のエコミュージアム資産の所有と管理において協力体制にありますか？
B-4	エコミュージアム活動に関し、成果よりも、活動自体を重視していますか？
B-5	地元のアーティスト、職人、作家、役者、音楽家たちとの協力活動を積極的に行っていますか？
B-6	エコミュージアムが実質的に、活発なボランティア活動によって支えられていますか？
C-1	エコミュージアム内で、ある一人のオーナーが所有するサイトや博物館が地域との関わりを排除することはありますか？
C-4	地域住民の活動の参加について、何らかの制限がありますか？
その他	
B-18	文化と自然の関係性を包括的に捉えようとしていますか？
B-20	遺産ツーリズムや文化ツーリズムなどの観光への発展はありますか？
B-21	エコミュージアムへの活動は、地域住民の意識やその改革、また経済に貢献していますか？

【引用参考文献】

赤塚朋子・栗原秀幸『環境教育の視点から考えるエコミュージアム構想、宇都宮大学教育学部教育実践総合センター紀要、第27号、415-424』平成16(2004)年

Corsane, G., Davis, P., Elliott, S., Maggi, M., Murtas, D. and Rogers, S. (2007) 'Ecomuseum performance in Piemonte and Liguria, Italy: the significance of capital', *International Journal of Heritage Studies*, 13(3), 224–239.

大原一興『エコミュージアムへの旅』鹿島出版会、平成11(1999)年

大原一興『日本におけるエコミュージアムのこれまでとこれから、2003年報、pp.75-80』財団法人かながわ学術研究交流財団、平成16(2004)年

大原一興・有嶋清之・藤岡泰寛『三浦半島における市民活動によるエコミュージアムの展開－地域を学ぶ場としてのエコミュージアム活動に関する研究－、「住まい・まち学習」実践報告・論文集９、pp.101-106』住宅総合研究財団、平成20(2008)年

◆大原　一興

横浜国立大学大学院教授。川崎区産業ミュージアム専門委員。日本エコミュージアム研究会会長。